

第一成分の冒頭における談話不変化詞Well

The Discourse Particle “Well” in First Pair Part Initial Position

ジョージ・オニール

Abstract

This paper examines the functions of utterances prefaced with the discourse particle “well” in first pair part positions in American English conversations. The discourse particle “well” has been researched from the vantage points of three major linguistic fields: Relevance Theory, Sociolinguistics, and Conversation Analysis. Although the methodologies and premises which underpin each of these fields vary greatly, all three approaches have argued that one of the key functions of the discourse particle “well” is to signal variance between the expectations of the situation and what will actually be produced; that is, the discourse particle “well” adumbrates an epistemic gap between the speaker and the interlocutor. This interpretation is not under contention in this paper; there are numerous examples of the discourse particle “well” performing exactly such a function. Instead, this paper argues that the discourse particle “well” has several additional functions—all of which are limited to first pair part initial position. The discourse particle “well” prefaces sequential counters, and appears before the reattempt of a nominally successful previous sequence’s first pair part action.

Keywords : キーワード……談話不変化詞、Well、会話分析、談話標識、連鎖的位置

0. はじめに

かなり大胆な言い方が許されるならば、今までの言語学において、日常会話という現象は、ほとんど研究の対象になってこなかった。チョムスキーの生成文法は言うまでもないが、ほとんどの言語学の分野には、実際に交わされた言語的現象が研究の的となっておらず、理論的モデルを証拠づけるには、言語学者の思考にしか基づいていない言語が用いられることが多いと言っても過言ではない。だが、実際に交わされた英語は、理想化された言語のモデルに現れない現象に溢れていると指摘しなければならない。実際に交わされる

言語に頻繁に現れる現象の一つは談話不変化詞Discourse Particlesと呼ばれるものである。

談話不変化詞は日常会話に出現する頻度が極めて高い。Jucker & Smith (1998) によれば、談話不変化詞はほぼ5秒ごとに日常会話に現れる。談話不変化詞は会話の成り行きそのものに影響を及ぼすと結論づける学者もいる (Ruhlemann 2007)。したがって、談話不変化詞の使用頻度と影響力を見ただけでも、研究する価値が否定できないものである。

談話不変化詞を分析の対象にした本格的な研究はSchiffrin (1987) を始め、80年代から繰り返されてきた。特に関連性理論が談話標識の理解を深めた実績が大きく、認めなければならない。だが、談話不変化詞の研究は、出発点からかなり進歩したものの、談話不変化詞が談話に果たす機能と談話不変化詞が占める連鎖的位置との関係を明らかにした研究は皆無に近い状態だと言わざるを得ない。本研究の目的はその空白を埋めることである。本研究は談話不変化詞wellが実際に交わされたアメリカ英語に占める連鎖的位置と会話に果たす機能の関係を検討する。

1. 先行研究

本稿の論点は三つの概念を基盤としている。「連鎖的位置sequential position」、「談話不変化詞discourse particle」、「連鎖的位置による影響sensitivity to sequential position」である。それぞれの概念は本研究の中核の一部となるので、先行研究を個別に紹介し、それぞれの概念の詳細を解説する必要がある。以上の概念を解明した上で、連鎖的位置に関連付けながら、談話不変化詞wellの先行研究を紹介する。

1.1 連鎖的位置

連鎖的位置は会話分析から派生された概念であり、会話という活動は組織化され、構造化されているという前提に基づくアイデアである。会話は組織化され、組み立てられていると想定すれば、会話の内部構造を識別し、分類することが可能となる。しかし、連鎖的位置の解説と定義に入る前に、連鎖的位置の理論的基盤をなしている会話分析の基本概念を紹介する必要がある。本節は会話分析が基盤とする概念の紹介から始まり、連鎖的位置の定義に至る。

1.1.1 会話の順番取りシステムと順番の移行適切箇所

会話分析が基礎とするすべての概念は、会話の参加者が相手の発話の完結点を予期し、話す順番を交代する概念に由来する。会話は会話に参加している人々がそれぞれ自分勝手に話をする活動ではなく、何らかの規則に基づき、話す順番が決定され、会話は組織的に進行する相互行為である。話す順番が交代される際、多くの場合、沈黙が現れずにスムーズに行われる。会話分析の研究に携わっている学者によれば、これは会話の参加者が相手の進行中の発話がいつ完結されるか、予期できる能力があるからである (Ford &

Thompson 1996, Liddicoat 2004)。つまり、聞き手は話し手の進行中の発話の潜在的完結点がどこか、ある程度分かるのである。話し手の発話が一旦終わり、次に話す人の順番が始まることができる点は「移行適切箇所transition relevant place」という。上述したように、聞き手は話し手の進行中の発話の潜在的完結点を予期しているので、聞き手は話し手の進行中の発話の「移行適切箇所」も予期しているわけである。以下の例はこの原理を表す。(Schegloff, 1997, 172より)

- 4 Tony : How are you.
 5 Marsha : Fi::ne.
 4 トニー : 元気ですか?
 5 マルシャ : 元気だよ。

以上の例には、トニーが「How are you」とマルシャに訊き、この連鎖を始める。「you」の後に「移行適切箇所」が生じる。「移行適切箇所」でマルシャが自分の発話を生産しはじめるだけではなく、マルシャが間を置かずに「元気だよ」と応答した。会話分析によれば、マルシャが間を置く必要がなかった理由はマルシャが相手の発話の潜在的完結点を予期しているので、いつ自分の応答を切り出せば適切なのか分かっているからである。

上述した概念は「順番取りシステムturn taking system」の基盤となっている。「順番取りシステム」は会話分析が相互行為の前提とする概念である。会話の参加者は会話を行う際、相手の順番の潜在的完結点を予期し、潜在的完結点で移行適切箇所が生じると想定し、想定された移行適切箇所ですべて自分の発話を生産する。このシステムは想定されているが、必ずしもいつもうまく運用されるわけではない。沈黙と重複は会話に頻繁に現れるものである。だが、沈黙と重複が会話に登場する場合、何らかの意義があると推定されている。つまり、移行適切箇所がうまく運用されていない場合、何らかの分析が求められる。

1.1.2 連鎖と拡張連鎖

会話における発話の種類は限定されることが多い。というのは、ある発話が生産された後、どの発話で応じても適切であるわけではない。先行する発話は次に来る適切な発話の種類をある程度限定する機能がある。例えば、「質問」が会話に登場した後、次に来る適切な発話は何らかな「応答」である。同じように、「挨拶」があれば、「挨拶」が返されることが適切となる。簡単に言えば、ある発話は他の発話の生産を要求する。以後、他の発話の生産を要求し、他の発話の出現を適切にする発話を「第一成分First Pair Part」と称する。以下の例は他の発話を要求する「第一成分」を表す。

(Schegloff, 1997, 172より)

- 4 Tony : How are you. (第一成分)
 4 トニー : 元気ですか (第一成分)

だが、「第一成分」は必ずしも一つの文のみで構成されているわけではない。以下の「第

一成分」は二つの文で構成されている。

SBCSAECHA011 (会話分析の表記法に基づき、書き直したものである)

494 *DORI: I was just absolutely soaked. (第一成分の開始)

495 *DORI: Wasn't I. (第一成分の完了)

494 *ドラシー: あたしはビショビショに濡れちゃったよね (第一成分の開始)

495 *ドラシー: このとおりのよ. (第一成分の完了)

第一成分をなす発話が終了した点で移行適切箇所が生じ、次に来る発話が現れ得るところを開けておく。というのは、移行適切箇所では、他人が話す義務が生じるのである (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974)。しかし、移行適切箇所が生じ、他人が話す義務があっても、第一成分の次に来る発話は何でもよいわけではない。第一成分の後に現れる発話の種類は第一成分の種類によって、ある程度、制限される。第一成分をなす発話が質問であり、第二成分をなす発話がその質問に応じる発話であれば、適切である。例えば、以下の例に現れる第二成分は第一成分に合う発話である。

(Schegloff, 1997, 172より)

4 Tony: How are you. (第一成分) (移行適切箇所)

5 Marsha: Fi:ne. (第二成分)

4 トニー: 元気ですか. (第一成分) (移行適切箇所)

5 マルシャ: 元気だよ. (第二成分)

上の例では、トニーが「元気ですか」と訊き、第一成分を生産した。「元気ですか」である第一成分が適切にする第二成分の種類は第一成分に応じる応答である。「元気ですか」という質問に対して、マルシャが「元気だよ」と言い、トニーの第一成分が適切にする発話をマルシャが生産することによって、マルシャはトニーの発話が次に来る発話に対して設定した制限を受け入れたことが窺える。

次の例にも第一成分が設定する適切性の制限に見合う第二成分が現れる。

SBCSAECHA011 (会話分析の表記法に基づき、書き直したものである)

494 *DORI: I was just absolutely soaked. (第一成分の開始)

495 *DORI: Wasn't I. (第一成分の完了) (移行適切箇所)

496 *ANGE: Yeah. (第二成分)

494 *ドラシー: あたしはビショビショ濡れちゃったよね. (第一成分の開始)

495 *ドラシー: このとおりのよ. (第一成分の完了) (移行適切箇所)

496 *アンジ: そうね. (第二成分)

ドラシーの発話は「あたしはビショビショ濡れちゃったよね. このとおりのよ」である。この発話は他の発話の生産を要求する。だが、ドラシーの発話は付加疑問文なので、ドラシーの発話を極性疑問文として分類してもいい。極性疑問文が適切にする第二成分は肯定を表

す発話 (yes, yeah, uh huhなど)、または否定を表す発話 (No, nah, nopeなど) である。ドラシーの発話が終わり、「移行適切箇所」が生じた時点で、アンジはドラシーが生産した第一成分に合致する第二成分を発話している。

他の発話の生産を要求する第一成分と第一成分の要求に応じる第二成分の組み合わせは「隣接ペアadjacency pair」と呼ばれるが、第一成分と第二成分は必ずしも隣接しているわけではないので、本稿では「隣接ペア」という用語を放棄し、「基本連鎖base sequence」という用語を採用する。基本連鎖は会話の中核となるが、どの基本連鎖でも二つの発話のみで構成されるわけではない。実は、基本連鎖は拡張されることがよくある。というのは、基本連鎖の第二成分が現れた後、第一成分を生産した話し手が、新たな第一成分としては解釈されない、第二成分の評価、または認識を示すことがある。例えば、以下の例では、基本連鎖が第二成分の後、しばらく継続している。

(Schegloff, 2007, 119より)

- 1 Nan : hhh Dz he av iz own apart[mint?] (第一成分) (順番の移行適切箇所)
- 2 Hyl : [hhhh] Yeah,=(第二成分) (順番の移行適切箇所)
- 3 Nan : =Oh;
- 1 Nan : 彼は自分のアパートを [借りている?] (第一成分) (順番の移行適切箇所)
- 2 Hyl : [吸気音] 借りているよ = (第二成分) (順番の移行適切箇所)
- 3 Nan : =そうか

上の例に現れるOhは新たな第一成分をなさないなので、会話分析によれば、この基本連鎖は第二成分の後でも継続していると見なされる。新たな第一成分をなさない、第二成分の後に現れる発話は「連鎖終了成分sequence closing third」という。

しかし、基本連鎖が拡張される場所は連鎖の第二成分の後だけではない。基本連鎖の第一成分の前にも拡張がある場合もある。例えば、次の例に最初に現れる発話は典型的な第一成分のように見えるが、実は、新たな連鎖を会話に導入する場作りのために用いられているので、基本連鎖に先行している発話と見なされる。基本連鎖を会話に導入するための、基本連鎖の第一成分の前に現れる連鎖は「先行連鎖pre-sequence」という。

(Terasaki, 2004 : 195 (Schegloff, 2007, 38より))

- 1 Jim : Y'wanna know who I got stoned with a few(hh) weeks
- 2 ago? hh! (先行連鎖の第一成分) (順番の移行適切箇所)
- 3 Gin : Who. (先行連鎖の第二成分) (順番の移行適切箇所)
- 4 Jim : Mary Carter 'n her boy(hh)frie(hh)nd. hh. (基本連鎖の第一成分)
- 1 ジム : 数週前に俺は誰と一緒にメアリーファナーを吸ったか
- 2 知りたい? (先行連鎖の第一成分) (順番の移行適切箇所)

3 ギン： 誰. (先行連鎖の第二成分) (順番の移行適切箇所)

4 ジム： メアリー・カーターと彼女の彼氏だよ. (基本連鎖の第一成分)

上の例はジムの発話で始まる。しかし、ジムの質問は情報要求を行っているというよりも、情報を伝える場作りをしていると言った方が現実を表している。言い換えれば、ジムは情報伝達をしようとしているが、情報伝達を行う前に、ギンはその情報を聴く意思があるか、既知っているか、チェックしている。したがって、ジムの質問は情報要求ではなく、情報伝達を行うことを可能にするための発話である。そういう意味で、この質問は基本連鎖の第一成分である情報伝達に先行しているので、先行連鎖の第一成分と呼ぶ。

基本連鎖の第一成分と第二成分の間にも拡張がある。というのは、第一成分が生産された後、第一成分が要求する第二成分の生産が延期され、他の発話が現れることがある。例えば、次の例では、基本連鎖の第一成分が要求する第二成分が第一成分のすぐ後に現れていない。基本連鎖の第一成分と第二成分の間に、他の連鎖が生じたからである。基本連鎖の第一成分と第二成分の間に出現するこのような連鎖は「挿入連鎖insert sequence」という。(Schegloff, 2007, 97より)

1 Bet : Was last night the first time you met Missiz Kelly? (基本連鎖の第一成分)

2 (1.0)

3 Mar : Met whom? (挿入連鎖の第一成分)

4 Bet : Missiz Kelly. (挿入連鎖の第二成分)

5 Mar : Yes. (基本連鎖の第二成分)

1 ベティ： 昨日の夜はケリー夫人に初めて会ったの？ (基本連鎖の第一成分)

2 (1.0)

3 メアリー： 誰に？ (挿入連鎖の第一成分)

4 ベティ： ケリー夫人 (挿入連鎖の第二成分)

5 メアリー： はい、そうです (基本連鎖の第二成分)

上の例で、ベティは「昨日の夜は、ケリー夫人に会うのは始めて会ったの？」とメアリーに訊く。ベティが訊く質問が要求する第二成分の種類は「はい、そうです」のような発話、または「いや、そうではない」のような発話である。だが、メアリーはベティが指定している人を特定することができず、ベティが誰を指しているのかを確認しようとする。ベティが生産した基本連鎖の第一成分の後に現れたメアリーの発話は、その第一成分が指定した発話の種類ではない。逆に、基本連鎖の第一成分の後に現れた発話は、他の発話の生産を要求する新たな第一成分である。メアリーの発話「誰に？」は情報要求であり、この発話が要求する発話の種類は「情報伝達」である。ベティはメアリーの質問に応じ、適切な応答を生産する。だが、この時点においてもベティの質問が行った他の発話の生産の要求が以前と顕在しているので、メアリーは基本連鎖の第一成分が要求する発話の種類を生産す

るのである。

以上に見られるように、基本連鎖は必ずしも隣接している発話で構成されているわけではない。拡張は会話に頻繁に発生する現象である。一方、基本連鎖だけで構成される連鎖は珍しいとまで言わなくても、少数だと言っても過言ではない。つまり、会話の参加者は会話を行う際、かなり複雑な連鎖の組み合わせを生産し、相手の発話を監視しながら、自分の発話を他の発話が要求する種類に合わせ、会話を進めるのである。

1.1.3 連鎖的位置

会話においては、いかなる発話でも、連鎖の一部となる。したがって、発話は連鎖のどの部分を占めているかによって、「発話の位置」を特定することができる。例えば、基本連鎖の第一成分に現れる発話は基本連鎖の第一成分という「発話の位置」を占めている。さらに、基本連鎖の第二成分に現れる発話があれば、基本連鎖の第二成分という「発話の位置」を占めている。

もちろん、会話における「発話の位置」は相対的な概念である。「発話の位置」は常に他の「発話の位置」を前提とする依存的な概念である。というのは、ある「発話の位置」はいつも他の「発話の位置」との関係で、決まるものである。ある発話が基本連鎖の第二成分という「発話の位置」を占めているとすれば、他の発話が基本連鎖の第一成分という「発話の位置」を占めていると前提しなければならない。

「発話の位置」は必ず「連鎖」という概念の内部構造にかかわる概念なので、これから「発話の位置」という用語を廃棄し、「連鎖的位置」という用語を採用する。本稿は、いかなる発話も、特定可能な「連鎖的位置」を占めていることを当然とする。ある発話の「連鎖的位置」は、他の発話の「連鎖的位置」を前提とする相対的な概念であり、談話不変化詞の機能を識別することにあたり、役立つ概念であると考えられるので、これからの分析の大切な一部となる。

1.1.4 好選、非好選、逆転

上述したように、基本連鎖において、第一成分は他の発話の生産を要求する発話であり、第一成分に応答する発話は第二成分である。しかも、第一成分が要求する第二成分の種類はある程度制限されている。だが、第一成分が第二成分に加える制限は絶対的束縛でも、会話相手の自由意志を奪うものでもない。第一成分は限られた発話の種類を要求するものの、相手は必ずしも限られた発話の種類から一つを選び、発話を生産するとは限らない。第二成分は第一成分が要求する発話として現れることも、第一成分が要求しない発話として現れることもある。つまり、第二成分には二種類ある。第一成分が行おうとしている言語行為を完成させる第二成分は「好選的preferred」である。言い換えれば、第一成分が行おうとしている行為は第二成分の出現によって、成功または成立すれば、「好選的preferred」である (Levinson, 1983; Pomerantz, 1984; Sidnell, 2010)。例えば、次の例で

は晩ご飯を一緒に準備しているロリとメアリーがいる。以下の連鎖に現れる第一成分は情報要求であるが、応答する第二成分がその第一成分が求めている情報を提供しているので、第一成分が成立させようとしている行為が成功していると言える。

SBCSAECHA03 (会話分析の表記表に基づき、書き直したものである)

- 10 *ROY : Do you have a particular (基本連鎖の第一成分の開始)
 11 um
 12 (.) [use for the] red peppers. (基本連鎖の第一成分の継続)
 13 *PETE : [()]
 14 *ROY : as opposed to the yellow or green peppe[rs]. (基本連鎖の第一成分の完了)
 15 *MARI : [No] no (基本連鎖の第二成分の開始)
 16 it was all (.) salad peppers. (基本連鎖の第二成分の完了)
- 10 *ロリ : 唐辛子は (基本連鎖の第一成分の開始)
 11 えっと
 12 (.) [特別な] 目的なんかある? (基本連鎖の第一成分の継続)
 13 *ペイト : [()].
 14 *ロリ : ビーマンと違 [う?] (基本連鎖の第一成分の完了)
 15 *メアリー : [いや] いや (基本連鎖の第二成分の開始)
 16 全部、サラダに入れるだけ (基本連鎖の第二成分の完了)

ロリはメアリーに「唐辛子は特別な目的なんかある? ビーマンと違う?」と訊き、情報要求をする。メアリーの方は、「いやいや、すべてのペッパーはサラダに入れるだけ」と言い、第一成分であった質問が求める情報を伝達する。したがって、この基本連鎖の第一成分が実現させようとしている発話が見れたと結論づけられるので、上の例は「好選」の例である。

しかし、すべての第二成分が好選的であるとは限らない。第二成分は第一成分が求めている発話の種類ではない場合もある。というのは、第二成分は第一成分が指定する発話の種類から選択されないことがあるからである。第一成分が行おうとしている行為を完成させない第二成分は「非好選的dispreferred」と呼ばれる。別の表現を使えば、第一成分が行おうとしている行為を第二成分がブロックすれば、第二成分である発話は「非好選的dispreferred」となる (Pomerantz, 1984; Levinson, 1983)。例えば、次の例に現れる基本連鎖の第二成分は非好選的であり、第一成分である質問が求める情報を提供していない。

SBCSAECHA02 (会話分析の表記法に基づき、書き直したものである)

- 16 *MILE : Who suggested this to em. (第一成分)
 17 *HARO : I have no idea. (第二成分)

16 *マイル： 誰がこれを彼らに薦めたのだろう。（第一成分）

17 *ハロ： 知らない。（第二成分）

マイルがハロに「誰がそれを彼らに薦めたのだろう」と訊き、質問に答える情報を引き出そうとする。この質問は第一成分となり、好選的な第二成分の種類に制限を加える。好選的の第二成分になるには、第二成分は第一成分が要求する情報を提供しなければならないが、この連鎖においては、第二成分は求められた情報を出さないのが、非好選的の発話となる。

以上、第二成分を二種類に分別し、第一成分が行おうとしている行為を完成させる第二成分（好選）と第一成分が行おうとしている行為を完成させない第二成分（非好選）に分類した。だが、実は、三つ目の可能性もあるのである。第一成分はどのような第二成分が現れば適切かという制限を会話の場面に加えるが、たまに、第二成分を生産するはずだった人が、第一成分が実現させようとしている発話を生産しないだけでなく、第一成分が会話の場面に加える制限を完全に無視し、逆に新たな第一成分を生産することもあるのである。すなわち、第二成分を生産することが適切な箇所、新たな第一成分が現れるということである。他の発話を要求する第一成分の後に新たな第一成分が現れる現象を「逆転 counter」と言う (Schegloff, 2007, 16-19)。次の例は子供と母親の会話である。連鎖は第一成分として始まっているが、最初の第一成分が要求する第二成分が現れず、代わりに、逆に他の発話を求める新たな第一成分が現れる。

(Tarplee, 1991 : 1 (Schegloff, 2007, 17より))

1 Chi : What's this (基本連鎖の第一成分)

2 Mom : er:m (.)yofu t]ell me: what is it (基本連鎖の第一成分の逆転)

3 Chi : [()]

4 (1.0)

5 Chi : ze:bra (基本連鎖の第二成分)

6 Mom : zebra: ye:s (連鎖終了成分)

1 子供： これは何？（基本連鎖の第一成分）

2 母親： えっと、[それ] は何か教えてちょうだい（基本連鎖の第一成分の逆転）

3 子供： [()]

4 (1.0)

5 子供： シマウマ（基本連鎖の第二成分）

6 母親： シマウマ、そう。（連鎖終了成分）

子供は「これは何？」と母親に訊き、情報を引き出そうとする。だが、母親は同じ質問を聞き返すだけだ。聞き返された子供が母親が訊いた質問が求める情報を提供しているのが、母親の質問は子供が生産した第一成分の直後に現れた新たな第一成分であることが分かる。これは逆転の例である。

以上、第二成分の種類を検討してきた。第一成分が成功させようとしている行為に合致する第二成分は好選的で、第一成分が成立させようとしている行為をブロックする第二成分は非好選的である。だが、第一成分が第二成分に加える制限を完全に無視し、新たな第一成分が現れる場合、それは逆転である。非好選的第二成分および逆転は談話不変化詞wellと関係しているの、以下の分析に再び現れる。次節で、談話不変化詞をいかに定義すればよいかという問題を取り上げる。

1.2 談話不変化詞

1.2.1 談話不変化詞の定義

本節では、考察対象であるwellが所属している範疇である「談話不変化詞discourse particle」の特徴を解説する。なお、談話不変化詞について記述するためにより広く用いられる「談話標識discourse marker」を談話不変化詞と比較しながら、談話不変化詞の概念を定義する。

伝統的な言語学は談話標識と談話不変化詞を言語運用上の現象と見なし、分析の対象から排除してもよい、単なる間違いのようなものとして片付けた。特に統語論を重視した学派は談話標識と談話不変化詞が構文の一部をなさないため、考察する意義を否定してきた。だが、言語学の焦点は理想言語モデルにしか存在しない構文から実際に話された談話へと移り、その結果、言語学は談話不変化詞の現れる頻度と重要性を認めなければならない段階にまで達したのである。Schiffrin (1987) の先駆的な研究は談話不変化詞がいかに談話の構造に貢献するのかを初めて解明した。他の研究者はSchiffrinのアイデアを引き継ぎ、さらに発展させた。

だが、談話不変化詞の談話における役割を解明しようとする学者たちは常に同じ問題に煩わされる。それは、談話標識と談話不変化詞は自然な品詞の一部ではないため、不自然な、異質的な範疇を構成するという事実に関係する問題である。というのは、談話不変化詞の区別と分類は簡単なことではない上に、談話不変化詞はさまざまな語源から派生されているので、語によって、「談話不変化詞性」が微妙に、または随分異なる。したがって、談話不変化詞を解明するためには、談話不変化詞の異質性を認めるよりいっそう柔軟な分類方法が求められる。Fischer (2006) は談話不変化詞を分析する際、談話不変化詞の特徴により当てはまる語は「より談話不変化詞的」で、より当てはまらない語は「より談話不変化詞的ではない」という尺度に基づく分類方法を推薦する。本稿はFischer (2006) が推薦する分類方法を採用する。

では、「より談話不変化詞的」な特徴とは何だろうか。本稿は、談話不変化詞を以下の特徴に基づいて、定義するが、ある談話不変化詞は必ずしもすべての特徴に当てはまらないかもしれないので、より多くの特徴に当てはまる語はよりよい談話不変化詞の例とし、より少ない特徴に当てはまる語は談話不変化詞に変化しかけているとする。純粋な談話不

変化詞は以下の特徴をもっている。1) 統語論的に構文の一部とならない (Schiffrin 1987, Fischer 2006)。2) 一義的な意味がある (Blakemore 2002, Brinton 1996)。3) 文頭に現れる。より正確に言えば、文の主語の前に現れる (Schiffrin 1987, Kuo 1994, Fischer 2006)。4) 任意的である (Schiffrin 1987, Kuo 1994, Fischer 2006)。5) 構文の真理条件にあまり影響しない (Borderia 2008, Fraser 2006)。6) 主に構文が表す情報を処理する手続きを相手に伝達する (Blakemore 2002, Schourup 2001)。7) 以前持っていた意味論的な意味がなくなった (Fischer 2006)。したがって、意味論的な意味がある程度残っている *you know* と *I mean* は談話不変化詞とならず、談話標識として分類した方が適切である。8) 連鎖のどこに発生するかによって、果たす機能が変わる。すなわち、「連鎖的位置に影響される」のである (O'Neal 2010)。

本稿は、談話不変化詞 *well* の機能と役割を検討するものであるが、以下に解説するように、談話不変化詞は上述した談話不変化詞の特徴にすべて当てはまるわけではない。特に、談話不変化詞 *well* は上述した特徴のうち、二つに当てはまらない。まず、談話不変化詞 *well* は、以下の先行研究が示すように、非常に多義的である。談話不変化詞 *well* の中核的な意味を特定するのは極めて難しいので、本稿は、談話不変化詞 *well* に、一義的な意味を特定しようとせず、多義的な意味があると想定する。さらに、談話不変化詞 *well* は文頭に現れる回数が多いが、単独で現れる場合も、文中に現れる場合もあるので、上述した三番目の特徴は部分的にしか当てはまらないと認めざるを得ない。逆に、以下に説明するように、談話不変化詞 *well* が極めて当てはまる特徴もある。談話不変化詞 *well* は連鎖のどこに現れるかによって、表す意味がかなり変化するため、連鎖的位置による影響は極めて強いといえる。次節で談話不変化詞 *well* の先行研究について検討する。

1.3 談話不変化詞 *well*

本節では、談話不変化詞 *well* の先行研究を紹介する。談話不変化詞 *well* は多くの研究者の注意を引いたため、最も頻繁に研究されてきた。しかし、談話不変化詞 *well* の研究はうまく纏まらず、談話不変化詞 *well* にはさまざまな機能が備わっていると多くの分析者が結論づけている。

1.3.1 非好選的第二成分の生産を仄めかす談話不変化詞 *well*

会話分析の方法論的観点からみれば、談話不変化詞 *well* が果たす主な機能は「非好選的」な発話の生産を示唆することであると多くの言語学者が結論づけている (Owen 1981, Pomerantz 1984, Morris, White & Iltis, 1994, Kuo 1994, Schegloff & Lerner 2009)。というのは、談話不変化詞 *well* が使用されると、次に来る発話は第一成分が要求する種類の第二成分として現れないことを示唆する。この立場によれば、「非好選」を仄めかす談話不変化詞 *well* は必ず基本連鎖の第二成分の前置きとして現れる。

談話不変化詞を分析する方法論は完全に異なるものの、Schiffrin (1987) が談話不変化

詞wellを研究した際、談話不変化詞wellは談話の首尾一貫性からの逸脱を仄めかすと結論づけた。Schiffrinの理論的モデルにおける首尾一貫性は、期待されている談話の展開と関係があり、会話が参加者の期待通りに進めば、首尾一貫性が維持される。だが、談話不変化詞wellは「期待はずれ」の発話の生産を示唆する。つまり、Schiffrinの立場はPomerantzに近く、両者は談話不変化詞wellの役割は相手の期待或は好選が満たされないことを仄めかす機能がある。

関連性理論における談話不変化詞wellの研究もPomerantz (1984) とSchiffrin (1987) の分析と重なるところがある。関連性理論の観点から行われた研究によれば、談話不変化詞wellは関連性からの逸脱を示唆する機能がある (Watts 1987, Jucker 1993, Blakemore 2002, Innes 2010)。言い換えれば、談話不変化詞wellは、次に現れる発話が前の発話と最適な関連性がある発話ではないことを示唆する。

1. 3. 2 副詞wellに由来する談話不変化詞well

上述したように、多くの言語学者は、談話不変化詞wellを含む発話が、会話のコンテキストにおいて、「非好選的発話」または「首尾一貫性からの逸脱」または「関連性からの逸脱」をほのめかす機能があると考えている。だが、すべての学者がそのように考えているわけではなく、ある学者は談話不変化詞wellと副詞wellに共有する中核的意味があり、両者は基本的に同じような意味を表すと主張する。この見解によれば、副詞wellは「基準に達している」という意味を表し、談話不変化詞wellも似た意味があるとされる。したがって、話し手は談話不変化詞wellを会話に導入する際、何らかの「基準」を設定し、談話不変化詞wellがその基準に達していないことを示していることになる (Carlson 1984, Bolinger 1989, Schourup, 2001)。だが、この見解は問題を孕んでいると言わざるを得ない。副詞wellの表す意味が「基準に達している」とすれば、談話不変化詞wellの「基準に達していない」という意味はまったく逆の意味になり、副詞wellと談話不変化詞wellの中核的意味が基本的に同じだという結論は無理があるということになる。故に、本稿は談話不変化詞wellを分析する際、この見解を採用しない。

1. 3. 3 躊躇を表す談話不変化詞well

談話不変化詞wellは単なる躊躇を表すと考える学者もいる (Fraser 1996, Svartvik 1980)。しかし、Sidnell (2010) とSchegloff (2007) が示すように躊躇は頻繁に非好選的発話の前置きとして現れるので、躊躇を非好選という概念から完全に切り離すのは難しい。談話不変化詞wellが躊躇を表す場合が確かにあるが、談話不変化詞wellの使用は単なる時間稼ぎのためではなく、次に来る発話の種類と前の発話との語用論的關係を仄めかすので、談話不変化詞wellの躊躇を表す機能は非好選的発話を示唆する機能の一部として分類する方が妥当である。

1.3.4 引用に先行する談話不変化詞well

多くの言語学者は、談話不変化詞wellが非好選的発話の生産を示唆する機能があると主張する。ところが、非好選と関係のない談話不変化詞wellもあると結論づけている学者もいる。例えば、Muller (2004) とJames (1983) によれば、談話不変化詞wellは会話における引用の前置きとして現れることがあるとされる。しかも、この談話不変化詞wellは引用がまさに期待されている時に現れるので、その場合は非好選的発話と関係のない談話不変化詞wellの使用であるとMuller (2004) が結論づけている。

1.3.5 自己修復に先行する談話不変化詞well

会話中に相手の発話を聞き取れない場合も、聞いても意味が掴めない場合もある。このような状況では聞き手は「もう一度言って下さい」と言うかもしれない。または、自分が言ったことが相手にうまく伝わらなかったことに気づけば、自分の発話を言い直すかもしれない。このような現象は「修復repair」と呼ばれる (Schegloff 2007)。より詳しく言えば、修復とは、会話中に相互理解を妨害するトラブルを除去することである。

談話不変化詞wellは一種の修復と共に現れることがあるとMuller (2004) は指摘している。Muller (2004) の分析によれば、談話不変化詞wellは話し手の発話の自己修復の前に頻繁に現れる。事実、Muller (2004) のコーパスに最もよく現れるwellは自己修復に先行する談話不変化詞wellである。したがって、Mullerは談話不変化詞wellが発話の冒頭ではなく、発話中に出現すれば、修復を示唆する可能性が高いと分析している。

1.3.6 非直接的第二成分の生産を示唆する談話不変化詞well

Schegloff & Lerner (2009) は談話不変化詞wellと情報要求疑問文の応答文の関係を分析した際、好選的応答文の前に現れる談話不変化詞wellを発見した。Pomerantz (1984) の先駆的研究以来、会話分析の学会は談話不変化詞wellが主に非好選的発話を示唆する機能を有すると考えてきた。ところが、Schegloff & Lerner (2009) とMuller (2004) は好選的 second component の前に現れる談話不変化詞wellもあると指摘した。だが、Schegloff & Lerner (2009) が見つけた好選的 second component は特殊な例だと言わなければならない。Schegloff & Lerner (2009) が発見した談話不変化詞wellは好選的かつ非直接的応答の前に現れた。したがって、Schegloff & Lerner (2009) は談話不変化詞wellの非好選的 second component を談話に導く機能を認めながら、談話不変化詞wellは好選的かつ非直接的 second component を談話に導く機能もあると主張していることになる。

1.3.7 多義的な談話不変化詞well

翻訳の研究に携わっている言語学者は、談話不変化詞wellを外国語に翻訳しようとする時、多数の訳語が存在すると指摘する。翻訳研究の言語学者は、談話不変化詞wellが多数の訳語に相当するということは、談話不変化詞wellの多義性を表していると主張する (Aijmer & Simon-Vandenbergen 2003; Cuenca 2008)。談話不変化詞の研究を行う多くの

学者は、談話不変化詞が一義的だと結論づけているが、Muller (2004) とHansen (2006; 1998) が示したように、談話不変化詞は一義的かつ中核的意味がある場合もあれば、多義的な場合もある。本稿は、談話不変化詞wellは多義的意味があるという立場を取る。

1.3.8 さらに発話の生産を要求する談話不変化詞well

談話不変化詞wellは後続する発話の種類をある程度、事前に仄めかす機能があると多くの学者は考えている。このような談話不変化詞wellは発話の冒頭に現れる。ところが、すべての談話不変化詞wellが必ずしも発話冒頭に現れるとは限らない。単独で現れる談話不変化詞wellもある。上昇イントネーションを伴う談話不変化詞wellが単独で現れる場合、相手にさらなる説明または解説を求める効果があるとde Klerk (2005) が結論づけている。しかし、この機能は談話不変化詞wellに限定されておらず、談話不変化詞soもこの効果をもたらす場合があるので、この機能は談話不変化詞well特有の役割だと考えにくい (Raymond 2004)。


2. 分析方法

談話不変化詞wellと連鎖的位置の関係を検討するために、自然な日常会話に現れた談話不変化詞wellの例を多く収集する必要があった。そのため、カリフォルニア大学サンタバーバラ校のアメリカ英語の話し言葉のコーパスThe Santa Barbara Corpus of Spoken American English Part 1 (以後、SBCSAEP1と称する) に現れた談話不変化詞wellを検索し、集計した。SBCSAEP1とは、www.talkbank.orgでアクセス可能な、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の談話研究部によって作成された自然なアメリカ英語の話し言葉のコーパスである。SBCSAEP1は14個の自然な会話のサウンドファイルからなり、それぞれのサウンドファイルは15分から30分ぐらいである。SBCSAEP1は「会話文 transcripts」も含んでいる (Du Bois, Chafe, Meyer, & Thompson 2000)。

まず、SBCSAEP1の会話文に現れたすべてのwellを集計した。だが、SBCSAEP1に現れるwellは必ずしも談話不変化詞wellであるとは限らない。文字通りの名詞well(井戸)も、形容詞well(元気な)も、副詞well(上手に)も、追加的な意味を表すas well asのような特別な成句的表現に現れるwellもある。さらに会話文の脱文による意味不明のwellさえある。したがって、談話不変化詞wellと談話不変化詞wellではないwellを識別する必要があったため、本稿の2.2.1で指定した談話不変化詞の特徴を有するwellだけを談話不変化詞wellとして扱い、他のwellを分析の対象から除外した。

すべての談話不変化詞wellを特定した上で、談話不変化詞wellが置かれた連鎖的位置を特定した。それから、異なる連鎖的位置に置かれた談話不変化詞wellが会話中で果たしている役割を検討し、相違があるかないかを確かめた。次節で、発見した相違の詳細を報告する。

第一成分の冒頭における談話不変化詞Well

- 555 *キャサリン：一旦、反対側にマイナス3分の2があったら
 556 同、え、同分、が見つけ
 557 *キャサリン：えっと、えっと、えっと、えっと、
 558 すべての同分母はね
 559 同じ同分母になるだ [ろ]
 560 *ネイソン：  [じゃ] えっとえっとの同分 [母はなんだろ？]
 561 *キャサリン： [笑~~~~~]
 562 *ネイソン： 笑~~~~~
 563 *キャサリン：~~~~~そういう意味じゃなかったよ

まず、上の会話文に現れる対話はキャサリンが生産する「一旦、反対側にマイナス3分の2があったら、同、え、同分、が見つけ、えっと、えっと、えっと、えっと、すべての同分母はね、同じ同分母になるだろ」という第一成分から始まる。この第一成分は「情報伝達」であり、要求する第二成分の種類は何らかの「情報受諾」である。例えば、後続の発話が「あ、そうだね」または「そういうことだね」のような第二成分であれば、その第二成分は第一成分が設定する「条件付き適切性」に沿っているので、「好選的」である。だが、逆に、後続の発話が「いや、そうじゃないよ」または「いや、違うじゃない」のような「情報受諾」の拒否を示す第二成分であれば、その第二成分は第一成分が要求する種類ではないので、「非好選的」である。

ところが、キャサリンが生産した発話の発音が間違っており、ネイソンの冗談的になる。キャサリンが生産した第一成分の後に現れたネイソンの発話は好選的でも、非好選的でもない。ネイソンは「えっとえっとえっとの同分母は何だろう」と皮肉的に言う。言い換えれば、ネイソンが生産した発話は、キャサリンの第一成分が設定した「条件付き適切性」を無視しているのである。ネイソンの発話は、「情報受諾」でも、「情報受諾」の拒否でもなく、他の行為の生産を要求する「冗談」であり、新たな第一成分をなす。「冗談」である第一成分が要求する好選的行為は「笑い」である。非好選的な反応として、「沈黙」や「苦笑い」などが可能である。だが、キャサリンはネイソンの発話を冗談として扱い、好選的第二成分である「笑い」を生産する。したがって、ネイソンの発話は、「冗談」が実現させようとする行為を引き起こしたので、この連鎖は第一成分と第一成分が要求する好選的第二成分で構成されていると結論づけられる。

この会話文で注目に値することは、ネイソンが生産した発話の冒頭に現れたのは、談話不変化詞wellであるということと、ネイソンが生産した発話は、前の第一成分が設定した条件付き適切性を無視した「逆転」であるということである。これは愚然ではない。会話における「逆転」は頻繁に談話不変化詞wellを伴う。談話不変化詞wellは条件付き適切性からの逸脱を仄めかす機能は確かにあるが、非好選的発話の生産しか示唆しないわけでは

なく、条件付き適切性の無視を仄めかす機能も備わっている。つまり、談話不変化詞wellが第一成分が生産された後、次の発話の冒頭に現れれば、その発話は第一成分が要求する発話の種類ではない「非好選的発話」、または第一成分がなかったかのような「逆転」である可能性が高い。

もう一つの例は逆転と談話不変化詞wellの関係をさらに明らかにする。以下の会話文は、高齢者であるドラシー (DORI) とアンジ (ANGE) が会話を交わしているところから始まる。ドラシーは自分の健康問題を会話に導入する。

SBCSAECHA011 (会話分析の表記法に基づき、書き直したものである)

- 839 *DORI : My stomach (0.3) gives me trouble (第一成分の開始)
 840 (0.5) I cramp (第一成分の完了)
 841 .hh
 842 *ANGE : (2.0) .hh [Well what] (逆転の第一成分の開始) ←
 843 *DORI : [()]
 844 *ANGE : (2.0) Are are you (0.3) eating Tums
 845 (.) for cal[ci]um]. (逆転の第一成分の完了)
 846 *DORI : [No:]. (第二成分の開始)
 847 *DORI : [I'm not eating Tums]. (第二成分の完了)
 848 *ANGE : [laugh laugh laugh laugh]. (連鎖終了成分)
 839 *ドラシー : お腹 (0.3) が痛い (第一成分の開始)
 840 (0.5) ちょっと痙攣さえするよ (第一成分の完了)
 841 (吸気音)
 842 *アンジ : (2.0) (吸気音)「じゃ何を」(逆転の第一成分の開始)
 843 *ドラシー : 「()」
 844 *アンジ : (2.0) タムズを食べているの?
 845 (.) カルシウムのため? (逆転の第一成分の完了)
 846 *ドラシー : いや (第二成分の開始)
 847 *ドラシー : 「タムズを食べていない」(第二成分の完了)
 848 *アンジ : 「笑~~~~~」(連鎖終了成分)

この会話文はドラシーが生産した発話から始まる。ドラシーは「胃が痛いよ。ちょっと痙攣さえするよ」とアンジに伝える。この発話は情報伝達である第一成分で、要求する第二成分の種類は何らかの「情報受諾」である。アンジが「情報受諾」をする第二成分を生産すれば、好選的となる。例えば、アンジが「そうですか」または「あ、大変ですね」のような「情報受諾」をすれば、好選的の第二成分となる。しかし、「情報受諾」を拒否する発話を生産すれば、非好選的となる。例えば、沈黙が現れれば、非好選的の第二成分として理


解される。


だが、アンジが生産した、発話842は好選的な発話でも、非好選的な発話でもない。アンジは「じゃ、タムズを食べているの？カルシウムのため？」とドラシーに訊いた。アンジが生産した発話は質問で、他の発話の生産を求める情報要求であるので、アンジのこの発話も第一成分である。言い換えれば、ドラシーが生産した第一成分の直後にアンジは別の第一成分を生産したので、アンジのこの質問は逆転である。さらに、ドラシーはアンジの発話842を質問として扱い、アンジの質問が要求する情報を提供するので、ドラシーの応答846と847は好選的第二成分である。すなわち、アンジの発話が設定した「条件付き適切性」にドラシーの応答が合致したわけである。最後にアンジが笑い、連鎖を終了させるので、アンジの逆転は挿入連鎖の第一成分だという解釈は不可能となる。

この会話文にも、逆転の第一成分の前置きとして、談話不変化詞wellが出現している。談話不変化詞wellは、第一成分の後に現れる発話の冒頭にあれば、第一成分が要求する発話の種類が登場しないことを強く仄めかす。というのは、談話不変化詞wellは条件付き適切性に問題が生じたことを表し、返答する発話が生産される前から、会話の成り行きは第一成分を生産した話し手が思っている通りには進まないことを示唆する。

次の例も逆転と談話不変化詞wellの関係を明らかにする。以下の会話文では、離婚したトニーとマルシャが電話で話し合っている。トニーとマルシャは息子がいるが、マルシャの家には息子がトニーの家に行くはずだったのに、まだ来ていないので、トニーはマルシャに電話し、どうして息子が遅れているかを尋ねる。

Stolen, 1:01-2:17 (Schegloff, 1997, 172より)

- 4 Tony : How are you. (基本連鎖の第一成分)
- 5 Marsha : Fi:ne. (基本連鎖の第二成分)
- 6 (0.2)
- 7 Marsha : Did Joey get home yet? (基本連鎖の第一成分)
- 8  Tony : Well I wz wondering when 'e left. (逆転の基本連鎖の第一成分)
- 9 (0.2)
- 10 Marsha : hhh Uh:(d) did Oh: h Yer not in on what pen'. (hh) (d) (挿入連鎖第一成分)
- 11 Tony : No(h)o= (挿入連鎖第二成分)
- 12 Marsha : =He's flying. (基本連鎖の第二成分の開始)
- 13 (0.2)
- 14 Marsha : En Ilene is going to meet im.:Becuz the to:p wz ripped off v iz car which is tih say someb'ddy helped th'mselfs. (基本連鎖の第二成分の完了)

- 4 トニー： 元気？（基本連鎖の第一成分）
 5 マルシャ： 元気だよ（基本連鎖の第二成分）
 6 (0.2)
 7 マルシャ： ジョイは家に帰っている？（基本連鎖の第一成分）
 8  トニー： いや、実はいつ出発したか知りたいけど（逆転の基本連鎖の第一成分）
 9 (0.2)
 10 マルシャ： ん、えっと、あ、そうか。何が起きたか分からないね（挿入連鎖第一成分）
 11 トニー： 分からない（挿入連鎖第二成分）
 12 マルシャ： もう出発したよ（基本連鎖の第二成分）
 13 (0.2)
 14 マルシャ： で、エリンは迎えに行くよ。なぜかという、誰かが彼の車のサン
 ルーフを盗んだよ（新たな基本連鎖の第一成分の開始）

本稿の研究の対象になっている連鎖は7行から始まる。マルシャは「ジョイは家に帰っている？」とトニーに訊く。マルシャが生産する発話7は「情報要求」としての第一成分で、要求する第二成分の種類は何らかの「情報提供」である。だが、トニーは「実は、息子はいつ出発したか知りたいけど」と情報要求をする。トニーが生産した発話はマルシャの第一成分の要求する情報を提供するものではなく、他の発話の生産を要求する第一成分である。つまり、マルシャの第一成分のすぐ後に、また別の第一成分が現れたのである。トニーの発話は逆転の第一成分である「情報要求」であり、実現させようとしている第二成分の種類は「情報提供」である。マルシャが息子がいつ出発したかという情報を伝えれば、好選的発話となる。だが、次に現れるマルシャの発話はトニーの発話が設定する条件付き適切性を無視し、「あ、そうか、何が起きたか、分からないね」と言う。マルシャの発話は「情報伝達」で、新たな第一成分をなす。

この段階までだけを見れば、マルシャの発話もまた逆転の第一成分として分析してもよいが、8行目に始まったトニーの質問である第一成分は12行目に返答されるので、マルシャの第一成分は挿入連鎖の第一成分である。だが、挿入連鎖の第一成分であれ、逆転の第一成分であれ、第一成分であるので、第一成分に合う第二成分の生産を求めると。マルシャの「情報伝達」に対し、トニーは「分からない」と言い、「情報受諾」を生産する。トニーの好選的 second 成分は挿入連鎖を完成させ、基本連鎖の第二成分の生産がまた適切となる。12行目でマルシャは遂に8行目に現れたトニーの逆転の第一成分に応じる好選的 second 成分を生産する。マルシャは「彼は飛行中だよ」と言い、8行目にあるトニーの質問が要求する情報を提供している。

注目すべきところは8行目にあるトニーの逆転の第一成分の前に談話不変化詞wellが出現したことである。すなわち、談話不変化詞wellは好選的第二成分が現れないことを示唆する。実際に現れる発話の種類は非好選的発話または逆転であるかもしれないが、好選的発話が出ない可能性が非常に高いことを仄めかす。この役割を談話不変化詞wellの主な機能だと結論づけてもよいが、談話不変化詞wellは他の機能もある。次節で談話不変化詞wellの他の機能を検討する。

3.2 第一成分に再挑戦する談話不変化詞well

上述したように、第二成分の冒頭における談話不変化詞wellは非好選的発話が現れることを示唆する機能がある。しかし、談話不変化詞wellは非常に多義的で、談話において他の役割も果たす。次の例は、アリシア (ALIC) はメアリー (MARY) と友達がグレートファルズで待ち合わせができるかについて話し合っているところから始まる。だが、以下の例に現れる談話不変化詞wellは逆転を会話に導入するwellでも、非好選的発話を会話に導くwellでもない。アリシアは第一成分を生産し、好選的 second 成分の生産を求めるが、好選的 second 成分が談話に現れず、連鎖が終了する。だが、アリシアは諦めずに終了した連鎖の第一成分に再挑戦する。その際、談話不変化詞wellは再挑戦される第一成分の前に現れる。SBCSAECHA07 (会話分析の表記法に基づき、書き直したものである)

- 590 *ALIC : is there any way he could [like]. (基本連鎖の第一成分の開始)
 591 *MARY : [hh]
 592 *ALIC : meet us in Great Falls or something? (基本連鎖の第一成分の継続)
 593 *ALIC : (2.5) Cause I'd like to go up there and go to the
 594 (.) um
 595 (0.5) in Red Lobster? (基本連鎖の第一成分の完了)
 596 *MARY : (0.7) Really? (挿入連鎖の第一成分)
 597 *ALIC : Yeah. (挿入連鎖の第二成分の開始)
 598 *ALIC : (2.0) Cause I've been just
 599 cr:aving [seafood]. (挿入連鎖の第二成分の完了)
 600 *MARY : [That's the] halfway point (基本連鎖の第二成分の開始)
 601 he could do it. (基本連鎖の第二成分の完了)
 602 *ALIC : Yeah. (連鎖終了成分)
 603 *MARY : I bet he could do it. (連鎖終了成分)
 604 *MARY : (3.0) When though. (基本連鎖の第一成分)
 605 *ALIC : I don't know. (基本連鎖の第二成分)
 606 *MARY : (1.0) He goes [back] to school like the second. (基本連鎖の第一成分)
 607 *ALIC : [()]

- 608 Oh. (基本連鎖の第二成分の開始)
- 609 shoot. (基本連鎖の第二成分の完了)
- 610 *ALIC : (3.0) Well isn't there any way (基本連鎖の第一成分の開始：再挑戦)
- 611 like we
- 612 *ALIC : (.) that we could just meet him up there (基本連鎖の第一成分の継続)
- 590 *アリシア：彼は [どうしたら] (基本連鎖の第一成分の開始)
- 591 *メアリー： [吸気音]
- 592 *アリシア：グレートファルズで待ち合わせてくれるかな (基本連鎖の第一成分の継続)
- 593 *アリシア：(2.5) なぜならあそこに行きたいからね、あのとこ
- 594 (.) えっと
- 595 (0.5) レッドロブスター (基本連鎖の第一成分の完了)
- 596 *メアリー：(0.7) 本当 (挿入連鎖の第一成分)
- 597 *アリシア：そう (挿入連鎖の第二成分の開始)
- 598 *アリシア：(2.0) だって海鮮料理が
- 599 食べた [くて]. (挿入連鎖の第二成分の完了)
- 600 *メアリー： [そこ] はちょうど真央だからね (挿入連鎖の第二成分の開始)
- 601 彼はできる (基本連鎖の第二成分の完了)
- 602 *アリシア：そうね (連鎖終了成分)
- 603 *メアリー：彼はできると思うよ (連鎖終了成分)
- 604 *メアリー：(3.0) でもいつ (基本連鎖の第一成分)
- 605 *アリシア：さあねえ (基本連鎖の第二成分)
- 606 *メアリー：(1.0) 彼は二日に [学校] に戻って行く (基本連鎖の第一成分)
- 607 *アリシア： [()]
- 608 そうか (基本連鎖の第二成分の開始)
- 609 くそっ (基本連鎖の第二成分の完了)
- 610 *アリシア：(3.0) でもなあ (基本連鎖の第一成分の開始：再挑戦) ←
- 611 わたしたちはどうにか
- 612 *アリシア：(.) あそこで待ち合わせができないかなあ (基本連鎖の第一成分の継続)

この例は三つの基本連鎖で構成され、非常に複雑なやりとりである。まず、この例はアリシアの第一成分から始まる。アリシアは590行目にメアリーに「彼はグレートファルズで私たちと待ち合わせできるか」と訊き、メアリーから情報を引き出そうとする。アリシアの第一成分は名目上、「情報要求」である。

アリシアの発話はメアリーが適切な第二成分を生産することを求める。好選的第二成分は何らかの「情報伝達」であるが、非好選的第二成分は要求された情報を伝達しない発話である。アリシアの基本連鎖の第一成分に応じる発話は600-601行に現れる。メアリーが生産した第二成分が示すように、メアリーはアリシアが590行目に生産した発話を「情報要求」として処理し、要求された情報を伝える「情報伝達」をする。したがって、メアリーの観点から見れば、メアリーの発話は好選的第二成分であり、連鎖は完結された。

しかし、話し手が意図した意味は必ずしも聞き手が受け止める意味だとは限らない。発話は文法やイントネーションに固定的に結び付けられた内在的かつ不動的な意味があるわけではなく、どの発話でも、相互行為において何を意味するのかは常に交渉可能になるのである。さらに、話し手の意図と聞き手の理解の間にギャップが生じれば、話し手は頻繁に発話を再生産し、聞き手に発話の意図の再解釈を促すことがある。

610行目から612行目にかけて、アリシアは590行目から595行目までに生産した発話を再生産し、メアリーに他の第二成分の生産を促す。というのは、メアリーが情報要求として解釈した590行目から595行目までの第一成分はアリシアが意図した意味ではなかったからである。もし590行目から595行目までの発話が情報要求だったら、メアリーが生産した第二成分は連鎖を完結したはずである。ところが、アリシアはあえて同じ第一成分を生産する。アリシアが610行目から612行目まで生産した新たな第一成分は590行目から595行目までの第一成分と同等で、メアリーの最初の解釈はアリシアの意図と一致していないことが窺える。言い換えれば、メアリーはアリシアの第一成分を情報要求として解釈したがアリシアは情報要求をしているのではなく、逆にメアリーを誘っているのであり、その好選的第二成分はメアリーが生産した情報伝達ではなく、「誘いを受諾する」ことである。したがって、アリシアは名目上、既に完結された連鎖の第一成分に再挑戦し、メアリーに自分が生産した発話の真の意図の再解釈を促しているのである。

4. 結論

これまでの多くの先行研究は、第二成分に現れる談話不変化詞wellが果たす機能を解明している。だが、すべての談話不変化詞wellが第二成分にしか現れないわけではなく、長い間、第一成分の一部として出現する談話不変化詞wellは研究されてこなかった。第一成分の一部として現れる談話不変化詞wellの機能と第二成分の一部として現れる談話不変化詞wellの機能は随分異なるものである。

連鎖の第一成分に現れる談話不変化詞wellは日常会話においてさまざまな機能を果たす。まず、第一成分の冒頭に現れる談話不変化詞wellは連鎖的逆転を示唆する。「逆転」というのは、第二成分の生産が適切なところに第一成分が生産されることである。したがって、これまでしばしば指摘されてきた「非好選的発話」の生産を示唆する談話不変化詞

wellは、実は「好選的ではない発話が現れる」ことを示唆すると言った方が現実に近い説明である。というのは、第一成分が生産された後、次の話し手が談話不変化詞wellを発話の前置きとして生産すれば、非好選的発話または逆転発話が生産される可能性が高いのである。

しかも、談話不変化詞wellは、別の連鎖の第一成分が行おうとした言語行為に再挑戦する意図を仄めかす場合もある。興味深いことにwell以外の談話不変化詞の中にも同じ機能を果たすものがある。談話不変化詞lookも名目上完結された連鎖の第一成分の再挑戦を暗に仄めかす機能がある (Sidnell 2007)。事実、Sidnell (2007) が示すように、談話不変化詞wellと談話不変化詞lookが共に会話に現れる場合さえある。談話不変化詞wellは名目上完結された連鎖の第一成分の再挑戦を示唆する機能があるが、談話不変化詞wellはこの機能を独占しているのではなく、他の談話不変化詞にも酷似した機能がある。

会話における談話不変化詞wellの出現は意味のある現象であり、後続の発話のありさまを示唆する重要な合図である。だが、注目に値することは、上述した談話不変化詞wellの機能が具現する連鎖的位置は第一成分に限定されているということである。談話不変化詞wellが会話において果たす機能はwellの連鎖的位置と深く関わっており、談話不変化詞wellの意味は連鎖的位置によって限定されていると言ってもよい。第二成分の冒頭に現れる談話不変化詞wellの機能と第一成分の一部として現れる談話不変化詞wellの機能とは必然的に異なるのである。

* 会話分析表記記号

会話分析の表記記号を紹介するスペースがないため、省略する。しかし、会話分析の表記記号は「会話分析の手法」に詳しく紹介されている (サーサス、1998)。

引用文献

- Aijmer, K. & Simon-Vandenberg, A. 2003. "The discourse particle well and its equivalents in Swedish and Dutch." *Linguistics*, 41(6), 1123-1161.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and linguistic meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bolinger, D. 1989. *Intonation and its uses*. Stanford: Stanford University Press.
- Borderia, S. P. 2008. "'Do discourse markers exist?'" On the treatment of discourse markers in Relevance Theory". *Journal of Pragmatics*, 40, 1411-1434.
- Carlson, L. 1984. *Well in dialogue games*. Amsterdam: John Benjamins.
- Cuenca, M. 2008. "Pragmatic markers in contrast: The case of well". *Journal of Pragmatics*, 40, 1373-1391.
- de Klerk, V. 2005. "Procedural meanings of well in a corpus of Xhosa English". *Journal of Pragmatics*, 37, 1183-1205.
- Du Bois, J. W., Chafe, W. L., Meyer, C., & Thompson, S. A. 2000. *Santa Barbara corpus of spoken*

American English, Part 1. Linguistic Data Consortium.

- Fischer, B. 2006. "Towards an understanding of the spectrum of approaches to discourse particles: introduction to the volume" . In K. Fischer (ed.), *Approaches to discourse particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Ford, C. & Thompson, S. 1996. "Interactional units in conversation: syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns" . In E. Ochs, E. Schegloff, S. Thompson (eds.), *Interaction and grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, B. 1996. "Pragmatic Markers" . *Pragmatics*, 6, 167-190.
- Fraser, B. 2006. "On the conceptual-procedural distinction" . Find articles. Retrieved September 19, 2009, from http://findarticles.com/p/articles/mi_m2342/is_1-2_40/ai_n17113874/
- Hansen, M. 1998. *The function of Discourse Particles*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hansen, M. 2006. "A dynamic polysemy approach to the lexical semantics of discourse markers (with an exemplary analysis of French toujours)" . In K. Fischer (ed.), *Approaches to discourse particles*. Amsterdam: Elsevier.
- Innes, B. 2010. "'Well, that's why I asked the question sir' : Well as a discourse marker in court". *Language in society*, 39, 95-117.
- James, A. 1983. "Well in reporting clauses: meaning and form of a 'lexical filler'". *Arbeiten aus Anglistik und Amerikanistik*, 8, 33-40.
- Jucker, A. 1993. "The discourse marker well: a relevance-theoretical account" . *Journal of Pragmatics*, 19, 435-452.
- Jucker, A. H. & Smith, S. W. 1998. "And people just you know like 'wow': Discourse Markers as negotiating strategies" . In A. H. Jucker & Y. Ziv (eds.), *Discourse Markers*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kuo, S. 1994. "Agreement and Disagreement Strategies in a Radio Conversation". *Research on Language and Social Interaction*, 27(2), 95-121.
- Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Liddicoat, A. 2004. "The projectability of turn construction units and the role of prediction in listening" . *Discourse Studies*, 6(4), 449-471.
- Morris, G., White, C., & Iltis, R. 1994. "' Well, Ordinarily I would, But' : Reexamining the nature of accounts for problematic events" . *Research on Language and Social Interaction*, 27(2), 123-144.
- O'Neal, G. 2010. 「談話の不変化詞Ohの連鎖的位置と意味機能」、『言語の普遍性と個別性』、1、69-85.
- Owen, M. 1981. "Conversational units and the use of "well..." . In P. Werth (ed.), *Conversation and Discourse*. London: Croom Helm.
- Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes" . In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Raymond, G. 2004. "Prompting action: the stand-alone "so" in ordinary conversation" . *Research on Language and Social Interaction*, 37(2), 185-218.
- Ruhlemann, C. 2007. *Conversation in context*. Sydney: Continuum.
- サーサス、G、1998.『会話分析の手法』、マルジュ社。
- Sacks, H., Schegloff, E., & Jefferson, G. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.

- Schegloff, E. A. 1997. "Whose text? Whose context?" . *Discourse & Society*, 8(2), 165-187.
- Schegloff, E. A., Lerner, G. 2009. "Beginning to respond: well-prefaced responses to wh-questions" . *Research on Language and Social Interaction*, 42(2), 91-115.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, L. 2001. "Rethinking well" . *Journal of Pragmatics*, 33, 1025-1060.
- Sidnell, J. 2007. "' Look'-prefaced turns in first and second position: launching, interceding and redirecting action" . *Discourse Studies*, 9(3), 387-408.
- Sidnell, J. 2010. *Conversation Analysis*. New York: Wiley-Blackwell.
- Svartvik, J. 1980. "Well in conversation" . In S. Greenbaum (ed.), *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. New York: Longman.
- Tarplee, C. 1991. *Working on talk: Interactions Between Adults and Young Children During Picture Book Labelling Sequences*. Paper presented at a Conference on Current Work in Ethnomethodology and Conversation Analysis, Amsterdam.
- Terasaki, A. 2004. "Pre-announcement sequences in conversation". In G. Lerner (ed.), *Conversation Analysis: Studies from the first generation*. Amsterdam: John Benjamins.